

古保利古墳群の基礎的研究 (2)

— 前方後方墳の検討 —

丸山 竜平

A Fundamental Study of Kobori Burial Mounds (2) : An Examination of the Zenpoukouhoufun

Ryuhei MARUYAMA

はじめに

総数138基を数える古保利古墳群中には前方後方墳が6基も認められる。一つの古墳群で、このように前方後方墳を多数含むものはそう多くは無い。

はたして、これら前方後方墳は、古墳群のなかでどのような位置を占めたのであろうか。それは分布上、あるいは立地上、さらには規模等においてである。またそれぞれの前方後方墳の年代はどのように想定し得るであろうか。さらにまた、このことによって古墳群の形成過程、ひいては支群の構成原理、群の構造等について解明を果たしたいと考える。

そこでまず最初に、それらの古墳を一基ずつ北から概観し、その特質を把握しておきたい。

1 前方後方墳の個別的検討

小松古墳

小松古墳はD支群(旧B支群)に属し、この支群総数17基のうち北から6基目となる。ゆえにD-6号墳と呼称する。古墳はその裾部に189~186mの等高線が巡る。ゆえに支群北端のD-1号墳の裾部が標高166m前後を巡ることからおよそ20mの比高差が認められ、また支群南端の18号墳・木戸越古墳の裾回り、標高155mとはその比高差31mである。つまり、この小松古墳がいかに同一支群中でも高所、好所に築造されていたかを推し量ることができる。

この古墳は南に前方部を向けた前方後方墳で、その全長およそ60m、後方部の裾は長さ34m、幅29mで、前方部のそれは長さ23m、先端部幅22m、括れ部幅14mである。また墳頂部は後方部長さ21m、幅12m、前方部長さ16m、同先端部幅9m、括れ部幅5mであった。また、前方部と後方部の比高差は3mである(墳丘の数値は、高月町教育委員会『古保利古墳群—詳細分布調査報告書—』1995年3月による。以下同じ。なお、数字が報告書と異なるものは、筆者が現地において得た数値である)。

なお、この古墳の特徴は、この古墳群では、a、最も北に位置する前方後方墳であることと、b、その後方部の裾に方形の作り出しとも墳丘とも見て取れる方形台状部が認められることである。また、c、墳頂部は平坦部を持ち、土饅頭形式ではない。なおまた、前方部先端に張り出し部が認められるが性格は不明である。そしてd、括れ部には左右とも平坦部が認められる。葺石も埴輪も当初から無いようである。

大浦古墳

E支群(旧C支群)に属し、この総数21基からなる支群中の北から16番目、16号墳となる。墳丘裾部に標高168~170mの等高線が巡り、隣接して築かれたこの支群のなかの盟主墳・野瀬古墳の裾とは170mラインで同一であった。そして高さが野瀬古墳の場合には4m近くあって、墳頂部が174mを測り、この点で大浦古墳は標高171mしかなく3mの差がついた。

この点からも、野瀬古墳が名実ともにこの支群の盟主であることがわかる。この裾部である標高170mは、この支群の北端がおよそ160mで、南端が167m前後であることから、その差がそれぞれ10mと3mあったことが分かる。

168mラインでも北端とは8m、地形が南へ上昇傾斜する南端でもなお1mの落差がある。大浦古墳が、野瀬古墳と並んで、支群中の高所、好立地を占地したことが分かる。当古墳は南へ前方部を向けた前方後方墳であり、その点では先の小松古墳と同一方位をとる。

規模は、全長が39mあり、基底部は後方部で、長さ22m、幅19.5m、前方部で長さ17m、先端部幅23m、括れ部幅11mであった。また、墳頂部規模は、後方部が長さ13m、幅9mを測り、前方部は長さ17m、同先端部幅15m、括れ部幅3.5mであった。

この古墳の第1の特徴は何と言っても、a, 南に上昇傾斜する尾根筋上に立地しながら、南に前方部を設けていることである。このため前方部が後方部よりもおよそ75cm前後高い。しかも、b, 墳丘の前後両端とも尾根筋からの堀切が少ない。つまり墳丘の裾端部が明確ではなく、尾根の左右斜面の墳丘裾は堀切底よりも下位にくる。このため前方部先端左右のコーナは尾根筋の斜面と一体で、墳丘裾部の明確な輪郭・範囲は認められない。c, 後方部墳頂は平坦部を持つ。しかし、方形ではなく長方形である。d, 前方部は通有の長方形をとるものではなく、三角形を呈し、大きく開く。このこととbの指摘の後半部分は同じ事である。この前方部の三角形は平面でのみ言えることではなく、立面でも指摘し得る。ゆえ平坦部の形成はない。また注目すべきことに、e, 前方部先端の堀切が浅いだけでなく、堀残しがあり、この道状遺構が、野瀬古墳の作り出しの脇に取り付く。つまり盟主である野瀬古墳と大浦古墳とが不可分の関係にあったことが窺え、前方部の短い野瀬古墳を相補う関係にあったと推定させる。あえて、f, 大浦古墳が支群の盟主野瀬古墳に隣接することを特質の一つに加えておきたい。

臼ヶ谷古墳

F支群(旧G支群)に属する、F-2号墳である。総数50基からなる支群中、北から2基目の古墳である。

全長28mの前方後方墳で、基底部の規模は後方部で、長さ14m、幅12.5m、前方部は長さ14m、先端部幅11.5m、括れ部幅6mを測り、墳頂部については後方部で長さ9.5m、幅7.5m、前方部では長さ10.5m、先端部幅6m、括れ部幅2.5mであった。

F支群は総延長750mにおよびその高低差も、最北端の寺ヶ浦古墳の基底部標高170mに対して、最南端のD-46号墳の裾部がおよそ196m前後となり、その間の比高差自体26mある。それのみか、この750mの間には幾つかのピークがあり、盟主墳である黒見古墳(F-44号墳で南から3基目である)や北谷古墳(F-43号墳)が位置するピークの基底部は、標高199mである。

このような中での盟主寺ヶ浦古墳はもちろん最も底位に位置することになるし、それに隣接する臼ヶ谷古墳もまた、裾部はおよそ177m前後で、ピークとの比高差は22mとなる。

つまりこの古墳の特質の一つは、これまでの最高所に位置した盟主、准盟主墳の立地とは異なり、支群の端で、かつ、a, 最下位に位置することである。また、この古墳も、さきの大浦古墳と同様に、南へ上昇する尾根筋にそって前方部が南へ向くことによって、b, 前方部が後

前方部よりも著しく高くなることである。比高差は1.2mにおよんでいる。

また、前方部も後方部もその裾部の切り込み整形が明確ではなく、裾部が把握しにくい。とくに前方部先端には一部堀切が入る程度である。ゆえに、c、尾根筋との間に明確な古墳区画の地業がなされておらないことが指摘し得る。この点はまた穿った考え方をすれば、d、前方部が一部通路となって山尾根に通じているかに思える。

このこととも関連して、前方部は幅の狭い長方形のそれではなく、e、大きな三角形を呈して広がり、もちろんその左右裾部も、コーナーも明確なものではない。また、f、墳頂部には明確な平坦部がない。なお、括れ部の東側にわずかに張り出しがあり、あるいは作り出しであるかもしれない。さきにも触れたようにこの古墳の北側に盟主である寺ヶ浦古墳がある。g、両者が不可分の関係にあって、このため近接して築造されたとみておきたい。

北谷古墳

F支群(旧D支群)に位置し、南から4基目に位置するF-43号墳である。

古墳の規模は、全長29mの前方後方墳で、その基底部は後方部が長さ17.5m、幅15m、前方部長さ11.5m、先端部幅12m、括れ部幅6mを測る。また墳頂部の規模は、後方部のそれが長さ9.5m、幅6.5mで、前方部は長さ8m、先端部幅4.5m、括れ部幅2.5mであった。

その特徴は、この支群の中でも立地を、a、最高所にとるもので、b、盟主である黒見古墳(前方後円墳)とは接して占地することにある。前方部も後方部もc、墳頂部は平坦部をもつ。尾根筋の緩傾斜地に築いたこともあり、また前方部先端を明確に築いていることもあって、先の白ヶ谷古墳や大浦古墳とはその尾根筋地形と前方部の方向との相違からくる立面の相違が大きい。おなじことは小松古墳が前方部を下降尾根筋に向けたことからくる違いもある。いずれにせよ、この前方後方墳はこれまでの同型墳のなかで最もそれらしいものといえる。

熊野山古墳

G支群(旧F支群)に属する前方後方墳で、総数21基からなる支群の北から10基目に位置する。G-10号墳である。尾根は南へ上昇して傾斜する地形にあり、支群全体ではその比高差は、北端から南端までを196.5m~235.5m前後とみて、およそ39m前後となる。

熊野山古墳はその前方部裾が標高230m前後を測るので、支群の半ばにあるにもかかわらず、地形の高まりが著しい箇所にも築かれたことが推定し得る。事実、後方部の尾根筋の裾は標高233.2mとなり最高所とは2.3mの差である。この熊野山古墳の後方部から最後の21号墳までは緩やかな尾根筋道であったわけである。

この熊野山古墳は緩やかな尾根筋が急に下降するいわば、その傾斜変換点に位置しているわけで、古墳築造の最適地である。しかし、緩傾斜である尾根筋から急傾斜となる尾根筋の肩側に後方部が築かれているため、前方部は急傾斜の尾根筋上に配置されることとなり、後方部裾と前方部裾が大きく北へ傾斜する。つまり前方部の裾の等高線が後方部へは回らないのである。ゆえに前方部頂部と後方部頂部の落差も2mと大きい。

古墳の規模は、全長27mで、基底部は後方部が長さ17m、幅16m、前方部が長さ10m、先端部幅12m、括れ部幅8mである。また墳頂部では、後方部長さ10m、幅7m、前方部長さ5.5m、先端部幅4.5m、括れ部幅3mである。

古墳の特徴は、すでに立地の点から触れたように、a、後方裾部の尾根筋が標高233.2mで、前方部のそれが230mあり、その落差が3.2mにも及ぶことである。いわゆる裾の回らない古墳である。正規の前方後方墳ではなく、変形前方後方墳とみてよからう。

また、この点と関連するが、後方部の背後堀切が徹底したものではないことである。

西側の堀切が浅く、東側の堀切が深いことは、東の平野部を意識しての築造かとも受け止め得る。あるいはb, 通路としての土橋を意識してのものか、とも考えられ、尾根筋と連携する古墳とも受け止め得る。c, 前方部も後方部もともに、裁頭型に近く、墳頂部に平坦部を持つ。

屋ヶ谷古墳

さきの熊野山古墳とおなじG支群に属し、G-15号墳となる。総数21基中の北から15番目である。その裾部の標高は231m前後となり、支群の南端部標高235.5mとは僅かに4.5mほど低いに過ぎない。この意味ではこの支群の盟主である大谷古墳・前方後円墳の裾部の標高233mとわずかに2m前後の高低差があるにすぎない。支群中の高所、好所に立地していることが指摘し得る。

古墳は、全長27mの前方後方墳で、基底部での規模は後方部の長さ16.5m、幅15.0、前方部長さ11m、先端部幅11m、括れ部幅6mであり、墳頂部のそれは後方部長さ11m、幅7m、前方部長さ9m、先端部幅5m、括れ部幅2mを測るものであった。当古墳の特徴は、a, 前方部先端が明確でなく、尾根を大きく断ち切る形で明確な堀切が設けられていなかったことである。これを通有の前方後方墳とみなすにはやや疑問である。しかし、前方先端部が設定されなかった訳ではなく、貧弱ながらも明確にそれと認識することができる。

後方部の尾根筋の堀切も大きくはない。あるいは、b, 前後の尾根筋とは通路、土橋によって連続していたが、跨いで渡れる程度とみてよかろう。またこのこととも関連して、c, 墳丘の左右幅が明確でなく、尾根筋の左右斜面と墳丘裾が連続することである。その後の埋没、流失があるとはいえ、元来より裾部が自然地形に大きく依存したものではなかったかと思われる。さらにこの点とも連動して、d, 前方部は大きく三角形に開くものではなかったかと推定される。またさらに、e, 後方墳頂部はコーナの自然崩壊が進んでいるが、方形ではなく長方形である。なお、屋ヶ谷古墳自体の特徴ではないが、その特質として、f, 上方に前方部を付き合わす格好で隣接し、盟主である大谷古墳を築くこと、である。同じ関係は北谷古墳にも指摘し得るし、臼ヶ谷古墳でも大浦古墳でも類似の現象を指摘することができる。

2 古墳群中に占める前方後方墳の性格

以上のように、個々の前方後方墳についてその特質を抽出してきた。ここでは、それぞれの古墳の特質を越えたところでの前方後方墳の性格を明らかにしてみたい。

古保利古墳群は、すでに明らかにしてきたように(「古保利古墳群の基礎的研究」『東海学園女子短期大学30周年記念論集』近刊予定、および「古保利古墳群の基礎的研究—盟主墳の検討—」『名古屋女子大学紀要 44号』1998年3月)、少なくともA~Iまでの9支群に区分することができる。この中で、C支群が、I支群にあたる後期群集墳の形成に先立つ古墳群とみるならば、これらC, I二支群を除外した7支群が前~中期、もしくは後期に属するものとなる。

そして、前方後方墳は、これら7つの支群中、A, BおよびH支群の3支群中には築造されない。支群との関係で言えば、D, E, F, Gの4支群に築造されたことになる。

D (旧B) 支群	E (旧C) 支群	F (旧D) 支群	G (旧E) 支群
小松古墳	大浦古墳	臼ヶ谷古墳	熊野山古墳
		北谷古墳	屋ヶ谷古墳

(1) なぜ、A, B, H支群中に前方後方墳が築造されなかったのか定かではないが、次の点は指摘し得る。つまり、A支群は厳密には前方後円墳1基のみからなり、前方部先端の他の1基を加えても2基しかない、単独墳に近い支群である。この点はB支群が同じく西野山前方後

円墳1基からなる単独墳での支群であること、また、H支群がわずかに3基からなるもので、盟主で前方後円墳である旭山古墳も単独墳での支群形成に近いということになる。つまり前方後方墳を含まない支群は、いずれも単独墳かそれに近い少数の古墳からなる支群だということである。

逆に言えば、当古墳群中の前方後方墳は、多数の古墳からなる支群が形成される場合には必ず採用される墳形であるということになる。ゆえ支群を形成する多数の古墳は前方後円墳よりもより一層前方後方墳と不可分の関係にあるようだ。たとえば、D(旧B)支群では、支群の最高所に小松前方後方墳を築き、前後に15基の円墳、方墳が続くが、そしてこの支群の前方後円墳である木戸越古墳は最南端の、しかも支群中最下位の標高155mに立地するといった具合であった。なお、この支群の最北端は、標高166m前後である。あるいは木戸越古墳はこの支群とは、年代的にも群構成においても関わりのない単独墳とみなした方が理解がしやすいかもしれないが、ここでは繁雑になるので触れない。

(2) つぎに、古墳数の多い各支群に前方後方墳が築造される実態は了解できたとしても、ではF、G両支群において、なぜD、E両支群と同様に一基ではなく、二基の前方後方墳が築造されなければならなかったのか、についての疑問である。

D支群が17基、E支群が21基からなり、それに比してF支群が50基からなるといった古墳基数の多さから説明できる部分があるかもしれない。このF支群が検討結果によっては二つの支群に将来分離できるといった具合になる。しかし、それのみではつぎのG支群が総数21基で二つの前方後方墳を築いていることから、整合性のある説明は不可能となる。そこで注意し得ることは、F、G両支群では、前方後方墳を二基含むだけでなく、前方後円墳をも二基含むことが知れることである。

しかも、これら前方後円墳は、いずれも前方後方墳と近接した関係にあつて、F支群の臼ヶ谷古墳は、その片方の盟主・寺ヶ浦古墳とはその間およそ25mほど隔たる程度である。それもその間に他の古墳を介在させることなく、隣接した関係をとる。

他方、この同じ支群の南端部に近いところに築かれた黒見古墳は、前方後円墳の墳形をとるもので、この支群の片方の盟主である。この古墳が、ここでは前方後方墳である北谷古墳と相前後対となつて一列に接して築造されている。黒見古墳の前方部は北谷古墳の後方部とその間隔を3m程隔てている程度である。そしてその間に両者を結ぶ平坦部が幅の広い通路のように存在した可能性がある。明らかに両者は有機的な関連性を持って同時期に築造されたものとみてよいのではないか。

つぎにこのF支群とは若干様相が異なるが、G支群をみてみよう。ここでは屋ヶ谷古墳がこの支群の盟主である前方後円墳・大谷古墳とその前方部を向かい合わせて対となり築造をみる。その間隔はおよそ5m前後である。すでに触れたように、屋ヶ谷古墳の前方部は明確な堀切が無く、あたかも大谷古墳の前方部に連結しているかのようである。ただ、大谷古墳の前方部先端は明確な墳丘が法面を作っているので決して相互に前方部が連結した格好ではない。いずれにせよ、このような両古墳の関係は同時期の築造を思わせ、さきの黒見古墳と北谷古墳との関係と大同小異である。

注目すべきはこの両者のみではない。この同じ支群中で、もう一方の前方後方墳である熊野山古墳でも、その尾根筋の北におよそ70mほど隔てて、前方後円墳である岩屋古墳がその前方部を相対峙させる格好で築造されている。その間に3基の古墳を挟むものの、あるいは対になつたものかと想定し得る。

そして対となった両者がこれほど離れて築造された理由には、いずれの古墳もがこの支群の中で、尾根筋の傾斜変換点に最も近い好所を占地したためであったと説明できよう。つまりこの両者は、大谷古墳と屋ヶ谷古墳の間に読み取れるごとく明確な上下関係にあったのではなく、岩屋古墳が前方部先端の明確でない亜種前方後円墳であるなら、熊野山古墳もまた前方部と後方部の裾回りが明確でないことから窺われる亜種前方後方墳であって、対現象であり、かつ類似形態をとる関係であったとみたい。だが、他の前方後方墳と前方後円墳との関係でいえば、前方後円墳が規模、立地において勝るといった傾向にあり、そのことを敷衍していえば、熊野山古墳が岩屋古墳に先行して築造されるといった築造の契機の遅早によって生じた立地の差異とみたい。そして古墳の規模も数値の上では2mの差があるが、熊野山古墳は見掛け上で大きくみせる部分があることを考えると、実質的な差は無いとみたい。

G支群の盟主墳の構成概念

上上位 大谷古墳 (前方後円墳・38m)	
下位 (中位)	(対) 屋ヶ谷古墳 (前方後方墳・27m)
下位 岩屋古墳 (亜種前方後円墳・25m)	
下下位	(対) 熊野山古墳 (亜種前方後方墳・27m)

このように見てくるならば、前方後方墳は、前方後円墳の下位に位置し、前方後円墳あつての前方後方墳かと思われる。つまり主墳もしくは盟主墳に近接した位置を占め、政治的地域首長と不可分の関係にあった被葬者が前方後方墳のそれとすれば、両墳形が対を形成しない支群においては、その欠如はいかなることになったのかといった疑問がおこるのである。

(3) 前方後方墳を含まない支群、単独墳は、深谷古墳と西野山古墳、そして旭山古墳の3基である。ここで想起されるのは、深谷古墳はこの古保利古墳群中では最古に属する古墳であり、また西野山古墳は古保利古墳群の一連の築造過程の中で最も新しく築かれた古墳ではなかったかということである。つまり、対現象は、古墳築造が尾根筋に定着してからの現象であり、墓域が尾根筋に固定し安定期に入ってから古墳群解体までのこの地域の社会的特質を反映した現象ではなかったか、と予想される。

さらに推測を重ねるならば、安定期以前には、前方後方墳は集落の近くの平地に築造されているのではないかと思われるのである。最近県下各地で発見されつつある平地の前方後方型周溝墓など尾根上に立地を移す以前のその一種ではないかとの見方もできる。また、中期以降の段階において、西野の山尾根から平地へ前方後円墳が立地を変えようとするその直前段階から、再び前方後方墳は、前方後円墳とはその立地をまったく異にしてしまい、両者の間に距離をおくのではないかといった推測である。たとえば、磯野山山麓の大森古墳は、支群から離れた単独墳である西野山古墳と対になるのではないかといった解釈である。あるいはまた、D支群の小松古墳にあつては、最古の深谷古墳と別支群をなしているながら対関係にあつたのではないかといった予測も成り立つであろう。ここではこれ以上の推測は差し控え次に進みたい。

3 前方後方墳の形式と年代

記述の上で1章と関連する部分もあるが、ここで、これら前方後方墳の型式と年代を求めておきたい。そのために墳丘形態の分析を進める。検討対象は小松古墳である。

小松古墳

その規模や立地など特徴はすでに述べた。また、古墳は埴輪や土器など年代の判別できる出土遺物はない。ゆえ、子細に古墳の墳形を観察すると次のような見通しを得る。

a, 後方部の墳頂が平坦部をなすことはこの古墳の特徴である。が、さらにb, その平坦部が、縦長の長方形を呈し、通常正方形でないことも示唆的である。しかも21m×12m(指数0.57)と著しい長方形である。おそらく墳頂部だけでなく、基底部の形状も正方形ではなく長方形なのであろう。

類例は、隣接するE支群の大浦古墳においてもそうである。後方部の墳頂規模は13m×9mである。正方形の指数は、0.69(9m÷13m)である。また、F支群の臼ヶ谷古墳にあっても後方部の頂部は長方形のようであるが、平坦部がなく、すでに流失したかに思える。95年『報告書』では、9.5×7.5mで、指数は0.78である。同じF支群の北谷古墳は、墳頂部に明確な平坦部をつくり、9.5×6.5mで、指数は0.68であった。さらに、G支群の熊野山古墳では10×7mで、指数は0.7である。同じく同一支群の屋ヶ谷古墳では11m×7mで、指数は0.63であった。

これからみて0.57、0.63、0.68、0.69、0.7、0.78と数値にばらつきがあるものの、0.78の数値が不明確なものであるとして除外すると、0.68～0.7に数値が集まり、いかに小松古墳や屋ヶ谷古墳が長方形の墳頂部を築いているかが分かる。

また、注意してよいのは、いずれの前方後方墳もが、正方形や、横長の形状をもつ後方部基底部、もしくは墳頂平坦部をとらないことである。

この古保利古墳群に最も近い箇所に築かれた、磯野山東南山麓尾根筋上の大森古墳は、全長62mの前方後方墳で、その規模もさきの小松古墳、全長60mとほぼ同大といってよい。数値を対比してみると以下のようなになる。かなり近似したものであることに気付くであろう。

この数値を比較すると次のことに気付く。つまり古墳の全長、規模に近似したものがあるものの、大森古墳はその前方部先端においておよそ70cmほどの高まりを示す。ただ、これが前方部の発達といえるのか、北小松古墳の封土の流出に由来するものか不明である。おなじことは前方部の先端幅が、小松古墳の22mに比して25mとなり、墳頂部における前方部先端幅に関しても小松古墳が9mであったのに比して大森古墳では12mを測るものであった。これらの両古墳の数値の比較の中から、小松古墳が大森古墳に先行する要素をもつと推定するには、後方墳頂部の検討が不可欠となる。

ここには墳頂部の形状が縦長長方形から正方形へと変遷するのか、それとも逆の傾向が読み取れるのかといった問題が残されている。ここでは、この点について少し検討しておきたい。

表1 小松・大森両古墳規模比較表 (単位m)

数 値	小松古墳	大森古墳
全 長	60	62
後方部基底部の規模	34×29	38.5×31.5
前方部基底部の長さ	16	23.5
前方部基底部先端幅	22	25
前方括部の基底部幅	14	13
後方部墳頂の規模	21×12	(14.5×10.5)
平坦部矩形指数	(0.57)	0.53
前方部墳頂の長さ	16.0	(22.5)
前方部墳頂先端幅	9.0	(12)
前方部墳頂括れ部幅	5.0	(4.0)
後方部高 (背後尾根筋から)	(5.0)	(4.0)
後方部高 (側面から)	(6.0)	(4.0~5.0)
前方部高 (前面尾根から)	(3.2)	(2.25)
前方部高 (側面から)	(3.0)	(3.0)
前方部高まり (括部から)	(現況-2、元水平か)	(+0.7)

(『古保利古墳群詳細分布調査報告書』、および現地調査による)

近江の前方後方墳

滋賀県下における前方後方墳の中でも最古の時期に属するのではないかと目されるものに近江町法勝寺古墳が(前方後方形周溝墓)がある。

天野川(息長川)の右岸に築かれた古墳のなかでも、いまだ弥生時代以来の方形周溝墓群の中に墓域を求めているもので、前方後方形周溝墓と名付けるに相応しいものである。古墳の持つ階層のなかでも最も民衆に近い立場を執った首長であったといえるかもしれない。

全長22mを測り、後方部は基底部で長さ13.2m、幅11.7mであった。形状は長方形とはなるが、その指数は0.88で、さきの古保利古墳群のなかでも見出だすことのできないかなり方形に近似したものであった。その年代も前方部先端の周溝内から出土した土器からみて古墳時代でもその初頭に位置付けし得るものである。

つぎに湖南に目を向けると野洲郡野洲町富波亀塚に所在するやはり前方後方形周溝墓の古墳である富波遺跡では、墳丘全長42mで、後方部長さ22m、幅20.7mを測り、前方部は長さ20m、幅19m、括れ部幅9mであった。この場合の後方部の方形指数は0.94となる。かなり方形に近いことが伺われよう。この古墳の年代は、直接時期を示す土器には恵まれなかったが、周溝の東角に周溝内の埋没が進行してのちに穿たれた土壌が認められその出土土器から下限を知ることができた。また前方部にも小さな土壌が穿たれており、土器の細片のため時期の決め手にならないものの、さきの周溝内に後に廃棄された土器の下限と整合するものであった。このような点から考慮すると、この古墳もまた古墳時代の布留式土器に先行して築造された古墳であって、その年代もまた古墳時代の初頭にまで遡ることが判明する。

この古墳もまた後方部が方形に近い形状であって、その年代も最古期に遡る点で前者と共通しており、古保利古墳群の後方部長方形墳に先行して、より方形に近い古墳が年代的にも遡る

ことが容認しうるのである。以下、後方部の指数を求めて一覧表を作成した。

表2 前方後方墳後方部矩形指数表

	全長	後方裾部			後方墳頂部		
		長さ	幅	比	長さ	幅	比
小松古墳	60	34	29.0	0.85	21.0	12.0	0.57
大浦古墳	39	22.0	19.5	0.88	13.0	9.0	0.69
臼ヶ谷古墳	28	14.0	12.5	0.89	9.5	7.5	0.75
北谷古墳	29	17.5	15.0	0.85	9.5	6.5	0.68
熊野山古墳	27	17.0	16.0	0.94	10.0	7.0	0.70
屋ヶ谷古墳	27	16.5	15.0	0.90	11.0	7.0	0.63
大森古墳	62	38.5	31.5	0.81	14.5	10.5	0.72
富波古墳	42	22	20.7	0.94			
法勝寺古墳	22	13.2	11.7	0.88			
高木古墳	36	25	26	1.04			
象鼻山古墳	42.8	22.95	25.86	1.12	14.5	14.0	0.96
七塚古墳1号	45.1	22.7	20.0	0.88	10.2	5.8	0.56
権現山古墳50号	55.0	30.0	31.5	1.05	16.0	13.0	0.81
〃古墳51号	42.7	23.7	35.0	1.47	6.0	8.0	1.33
備前車塚古墳	48.3	26.5	24.5	0.92	13.0	12.0	0.92

その所見は次のようである。

- (1) 後方裾部での規模（長さ、幅）の数比と後方墳頂部でのそれとは全く異なる。つまり裾部での平面プランと墳頂部でのそれとが相似形をなさない。
- (2) 後方裾部での数比は、1.04～0.81に収まり正方形からやや縦長の傾向をもつ。
- (3) 後方墳頂部の数比は、0.53～0.75に収まり、(1)で指摘した事実ばかりか後方裾部での矩形よりもより縦長傾向を著しく示す。
- (4) これを編年的観点からみれば、後方裾部に関しては、裾部が山尾根傾斜面に連続するため数値自体に正確を期し難く、比較資料の吟味が必要である。
- (5) 墳頂部の数比に関しては正方形よりも縦長プランの方により古相を仮定することができる。しかし、この場合でも、墳頂部の肩部が風化したものについてはこの限りではない。つまり、古墳後方部の数比からその新古の相を見定めるにはその裾部よりも墳頂部での数比が有効足り得ることである。

4 むすびにかえて

前方後方墳が尾根筋上の高所・好所を占地しながら世代を重ねたが、その築城順位は、D支群中の小松古墳－G支群中に屋ヶ谷古墳－F支群中の北谷古墳－E支群中の大浦古墳－G支群中の熊野山古墳－F支群中の臼ヶ谷古墳、と大略辿ることができる。

前稿（「古保利古墳群の基礎的研究－盟主墳の検討－」）で推測した前方後円墳との関連でいえば、次表（表3）のように群構成が考察できる。

表3

時期	支群	前方後円墳	変形前方後円墳	前方後方墳	変形前方後方墳	帆立貝式古墳	大型円墳
I	A	深谷古墳					
I	D			小松古墳			
II	G	大谷古墳		屋ヶ谷古墳			
III	F	黒見古墳		北谷古墳			
III	G		岩屋古墳		熊野山古墳		
III	E				大浦古墳		野瀬古墳
IV	F				白ヶ谷古墳	寺ヶ浦古墳	
IV	H	旭山古墳					
V	B	西野山古墳					
VI	D	木戸越古墳					

第一期ともいふべき古墳群形成当初には前方後円墳と後方墳の1支群中における対関係は認められない。深谷前方後円墳が単独に築かれたからである。ここに前方後方墳の性格として、群中他の古墳とともに築造されるといった傾向が看取できる。平地での前方後方墳形周溝墓の段階からの傾向がなお各地で尾を引くといってよい。前方後円墳に葬られる被葬者の性格をも暗示する。

第Ⅱ期からは同一支群中の前方後円墳と前方後方墳とは一対現象をなして築造される。大谷古墳と屋ヶ谷古墳がそれである。この支群中の対関係はⅢ期、Ⅳ期と続く。そして後方墳頂部数比が0.68、0.69、0.71と北谷、大浦、熊野山の各古墳で近似することから同期と想定したが、この3古墳がそれぞれ対となる古墳の墳形に関して相違することが注意し得る。黒見古墳と北谷古墳はF支群の正規の対関係とみなし得るが、熊野山古墳は前方部先端の不明瞭な岩屋古墳と位置関係でも対となり、しかもこのG支群ではすでに大谷古墳と屋ヶ谷古墳が正規の対関係をなすことから変則的である。また大浦古墳も大型円墳・野瀬古墳との対関係をなす。この両変則的対関係の形成は、あるいは野瀬古墳が正規の前方後円墳を採用していないことなどとも関連しているのかもしれない。

以上の所見をさほど矛盾無く組み替えたものが次の表である。

表4

時期	支群	前方後円墳	前方後方墳	帆立貝式古墳 (造り出しをもつ大型円古墳)
I	A	深谷古墳		
	D		小松古墳	
II	G	大谷古墳	屋ヶ谷古墳	
III	F	黒見古墳	北谷古墳	
IV	E		大浦古墳	野瀬古墳
	G	岩屋古墳	熊野山古墳	
V	H	旭山古墳		
	F		白ヶ谷古墳	寺ヶ浦古墳
VI	B	西野山古墳		
VII	D	木戸越古墳		

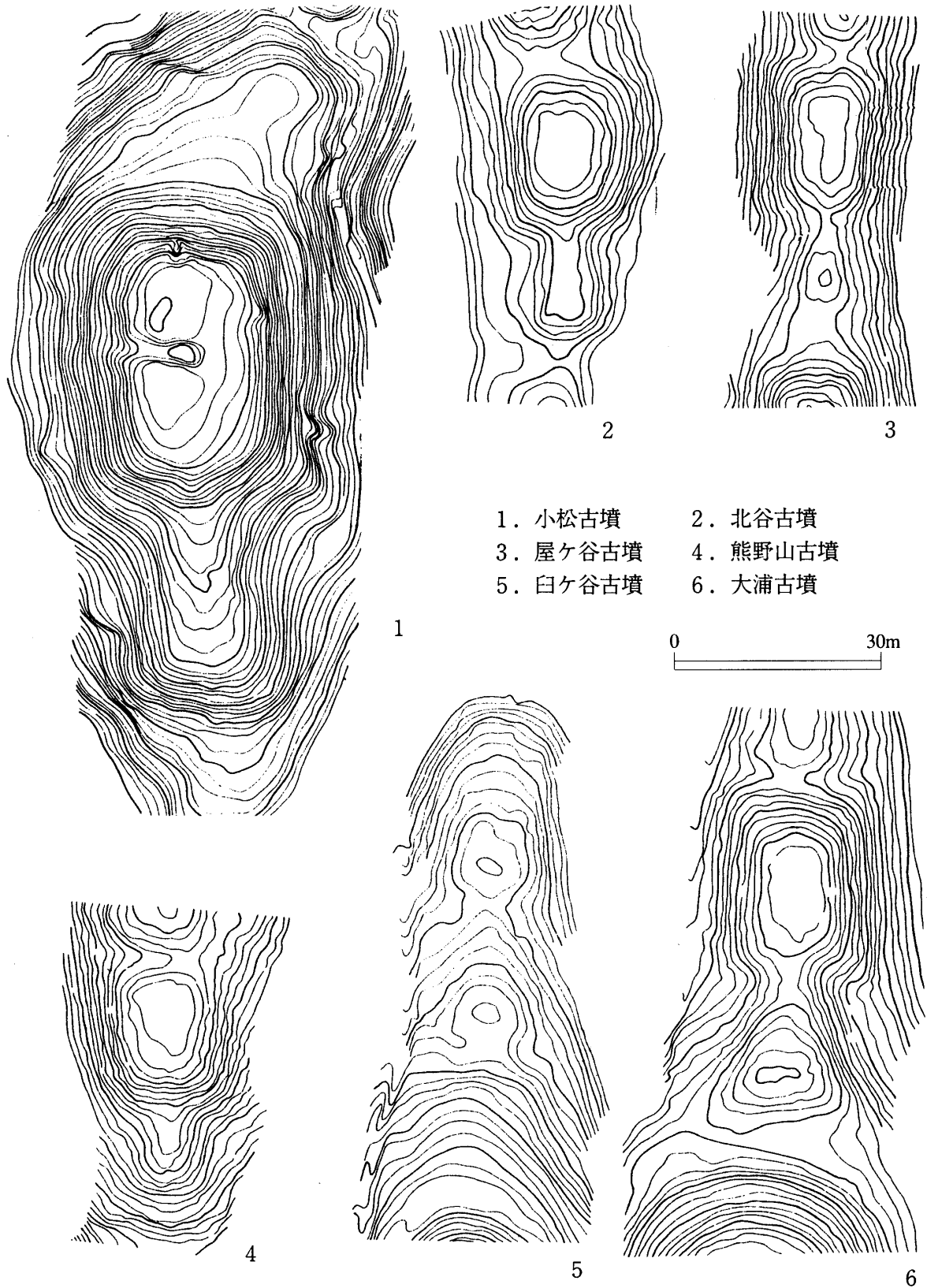


図1 古保利古墳群前方後方墳集成 (高月町教育委員会、『報告書』1995年より引用、一部改変)

大きくⅠ～Ⅵまで6段階、6世代(Ⅶ、木戸越古墳を除いて)が順次尾根筋の頂部を占地しながら古墳群を形成してきたことを推測してきた。その結果、Ⅰ段階には前方後方墳と前方後円墳とが距離を置いて対関係を形成しているが、Ⅱ段階以降は4世代にまたがって前方後方墳が、首長墳と目される前方後円墳もしくは大型円墳と対関係を形成してきた。そして再び西野山古墳の段階で同一支群、同一古墳群中において対関係を崩壊させたことになる。

はたして、この対現象とは、一体どのような有機的関係を両者に見出だし得るのであろうか。また、その崩壊とはいかなる意味があるのか、これらの点については今後の課題としていきたい。